夢童

菅波　茂

2000、3、2

人のきずな

AMDAはなぜ緊急救援活動を迅速かつ効果的に実施することができるのか。それはひとえに人間関係の豊かさに尽きる。中米のホンジュラスとニカラグアで1998年に起き、数百万人が家を失ったハリケーン「ミッチ」について説明する。

ホンジュラスの日本大使館は派遣された自衛隊80人の活動の世話で手いっぱいだった。AMDA支部4カ国で構成された多国籍チームを受け入れてくれたのはペルー大使だった。大使はAMDAペルー支部長の友人の医師であった。私たちは大使公邸に現地本部を置いて救援活動を実施した。ニカラグアでは日本大使が現地の国営テレビに一緒に主演して、私たちの活動の意義をスペイン語で説明してくれた。

そしてなぜか、自然災害は金、土、日など週末に起こる。一番困るのは、駐日大使館が休みで、被災国へ入国するビザが手に入らず、むだに2、3日を過ごさなければならないことだ。それだけ救援活動が遅れて助かる人たちが犠牲となる。

2月23日から2日間、「第2回アジア―太平洋緊急救援機構（APRO）IN神戸」の会議が開催された。そして12カ国の駐日大使を中心とするAPROをアジア、太平洋地区だけでなく、地球規模に広げた国際支援および緊急救援機構（OGAR）という新機構が発足した。会長にはファラ、ジブチ駐日大使が選ばれた。この新機構の役割が日本からの緊急救援活動に果たす役割ははかり知れない。

ビザの問題だけでない。被災国の海外大使らとの連絡や国連、国際機関、各国政府、民間企業・団体への要請、交渉などを通じて、AMDAの救援活動の迅速性や効果がさらにレベルアップすることが期待できる。OGARの大使の数は近い将来50人になる予定だ。彼らの称号は特命全権大使である。すなわち各国を代表する権限を持っている。日本から世界へ。AMDAの最大の支援団体になる可能性がある。

（アジア医師連絡協議会代表、題字は筆者）